

⑱日本一や！天理（全国ラグビー大学選手権決勝）

2021年1月11日

ラグビーのお正月明けのもう一つイベントはもちろん全国大学ラグビーの決勝戦。今年は1/3の準決勝で帝京に勝った早稲田と明治に勝った天理が共に決勝戦に進んだ。結果は、○天理大 55-28 早稲田大●と初めて天理大学が覇者となった。関西勢の全国制覇は、なんと1985年のあの平尾誠二さんが主将の同志社大学以来の36年ぶり。

天理大学と云えば、ここ数年関西1位で大学選手権に出場、2019年には決勝で明治に、2020年は準決勝で早稲田に敗れている。3年かけてこの決勝にける想いは他の大学の比ではなかったと思う。しかしながら、優勝をすることは他の大学に勝るだけではなく、もっと重要な目的があったようである。決勝戦の天理のプレーはある意味「勝つための戦術」に徹していたようにも見えた。

2020年のコロナ禍の中、各大学とも6月まではほとんど練習がなく、学校もオンラインでの授業。夏合宿も開催できた大学はごく少数であったそうだ。天理大学も本格的に練習が始まったのが7月。そして8月12日に合宿所で新型コロナのクラスター発生。PCR検査を経て53名の陽性者が出たニュースも覚えている方も多いと思う。

ラグビー部合宿所には170名の学生の凡そ1/3が陽性患者となると陽性者の隔離と共に陰性者の生活をどのように確保すれば良いのか、想像に難くない。練習はそれから3週間活動停止。また天理市は人口6万人余り。天理大学の学生の占める割合も高く、市民の多くは新型コロナのクラスターに免疫がなかった。その中で天理大学の一般の生徒のバイト外し、教育実習の停止など健康な学生も市民から敬遠されるような事象が起き、天理市長が事を収めるために市民に向けてメッセージを発して収束に至ったそうである。

天理・松岡主将のインタビュー記事に「僕がいない間、リーダー陣がうまくまとめてくれ、教育実習から戻ったとき、練習を再開できたのは自分たちだけの力じゃない。小松監督が周囲の厳しい声を受け止めて、いろんなところに頭を下げてくれたから。感謝の気持ちだけでは足りない、今年こそ日本一をとるために頑張っていこう、と話しました。」と、あった。

今日の早稲田は、ちょうど対抗戦の最終戦明治との試合で何もさせてもらえなかった試合展開の再現のようでもあった。国立競技場での開催、観客は1万人を上回る数が居たのだろう。スタジアムの器が大きいせいかテレビ越しには極めて閑散として見えていた。閑散度合いがさらに早稲田のひとつひとつのプレーの温度を下げるかのようなようだった。また、その天理の黙々と点を獲るペースが、早稲田の闘魂の灯を静かに打ち消してゆくようにも見えた。

終わってみれば、55点と大学選手権決勝の最高得点をマークし、早稲田への勝利。松岡主将のインタビューもひととき大きな声、元気な声。「ディフェンスで我慢ができた勝利、23人が80分間身体を張り続けた結果の優勝！」と力強い言葉を語った。このコロナ禍でスポーツを通じて周りに大きな感動を与えてくれた優勝だった。

まるで3年前の決勝負けが、本年の優勝の為にあったような試合。「（天理の）過去のチームよりも経験値が高い今年のチーム。勝って泣くことはなく、嬉しさが勝って幸せな気分」天理・小松監督の言葉だが、これこそラグビーをやってゆく最大のご褒美ではなからうか。